

「テイル」の習得に与える母語の影響について


<https://doi.org/10.24412/2181-1784-2022-22-178-183>

砂川 有里子 Sunakawa Yuriko

筑波大学 博士（言語学）筑波大学 名誉教授

sunakawa0001@mac.com

英文要旨 (ABSTRACT)

Japanese aspectual form -TEIRU has various usages such as "in progress", "resultant state", "repetition", and "experience" depending on the lexical aspect of the verb and the context. In this paper, I will focus on "in progress" and "resultant state" and examine the influence of the Japanese learner's first language on the acquisition of -TEIRU.

1. はじめに

日本語のアスペクト形式「テイル」は、動詞の語彙的アスペクトや前後の文脈により「進行中」「結果残存」「繰り返し」など種々の用法に分けられる。本稿ではそれらのうちの「進行中」と「結果残存」に焦点を絞り、これらの形式の習得に母語の影響があるかどうかを考察する。

2. テイルの習得研究

テイルの習得に関する研究は、中国語、英語、ロシア語など、特定の言語話者に見られるテイルの使用実態を調査し、テイルの習得順序や誤用の要因を明らかにしようとするもの（許 1997、菅谷 2004、松井 2008、折原 2019、冉 2021、砂川近刊など）と、アスペクト仮説、プロトタイプ理論などをもとにしたテンス・アスペクト形式の普遍的な習得順序に照らして日本語のテイルの習得のありかたを解明しようとするもの（小山 2004、菅谷 2004、Sugaya & Shirai 2007、稲垣 2011、陳 2015 など）がある。以下ではこれらのうちのアスペクト仮説に基づく研究を概観し、その問題点を指摘する。

アスペクト仮説とは、テンス・アスペクト形式の習得に動詞の語彙的アスペクトと関わる普遍的な習得順序があるというもので、日本語の場合、継続相のテイルは活動動詞（action verb）から習得が進むことや、過去形のタは到達動詞（achievement verb）から習得が進むことが予想されるというものである¹。Sugaya & Shirai（2007）は、進行中を表す形態素がある言語とない言語を母語とする日本語学習者を調査し、アスペクト仮説と母語の影響との関わりを考察している。そして、基本的に学習者の母語にかかわらず進行中のほうが結果残存より習得が容易であるが、常にそれが当てはまるとは限らず、タスクのタイプや学習者の日本語能力の違いによる影響を受けること、また、手続き的知識が十分でない初期の段階では母語の影響を受けるが、習得が進んだ段階や手続き的な知識を必要としないタスクの場合には母語の影響を受けないことを述べている。このように、アスペクト仮説では母語によらずに普遍的な習得順序があることを主張しているが、これまでの研究では学習者の数が限られていることや母語の種類が限られていること、学習者の学習環境は調査方法がまちまちで比較が困難であることなどの問題がある。そこで本稿では、同じ条件で調査した異なる 6 つの言語を母語とする中級後半レベルの学習者の発話データに

¹ 「活動動詞」と「到達動詞」は Vendler(1967)の動詞分類によるもので、金田一（1976）の「継続動詞」と「瞬間動詞」、あるいは、奥田（1985）の「動作動詞」と「変化動詞」に相当する。

おけるテイルの使用実態の調査を行い、進行中と結果残存の習得に見られる母語話者ごとの特徴を探ることとする。

本稿の研究課題は以下の通りである。

1. 動詞の語彙的なアスペクトがテイルの習得に影響を与えるか。
2. テイルの習得に母語の影響が認められるか。

以下においては奥田（1985）に倣い、テイルの形で進行中を表すタイプの動詞を「動作動詞」、結果残存を表すタイプの動詞を「変化動詞」と呼ぶことにする。

3. データの概要と研究方法

本稿の分析には、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』（中納言 2.4.5 データバージョン 2021.05）に格納された「絵描写タスク」を使用し、海外の教室環境で日本語を学んでいる中級後半レベルの学習者を対象に調査を行う。絵描写タスクとは以下の絵パネルを見せて、そこでの情景をなるべく多く口頭で語らせるというものである。



学習者のレベル判定は J-CAT 図1 絵描写タスクの絵パネル に基づいて行った。表1に母語別サブコーパスの内訳を示す。比較のため日本語母語話者 50名のデータも調査した。

表1 母語別サブコーパスの内訳

学習者の母語	IDの頭文字	人数	語数
中国語	C	60	20032
英語	E	9	3458
ハンガリー語	H	18	6939
インドネシア語	I	15	5304
韓国語	K	29	9405
ベトナム語	V	18	6022

4. 語彙的アスペクトのタイプ別調査

本稿では、学習者が数多く使用している動作動詞「遊ぶ」「書く」「食べる」、変化動詞「倒れる」「座る」「割る」「壊す」についてテイルの正用と誤用を調査する。以下に正用と誤用の例を示す。用例の末尾の () 内は学習者の ID 番号である。

<正用例>

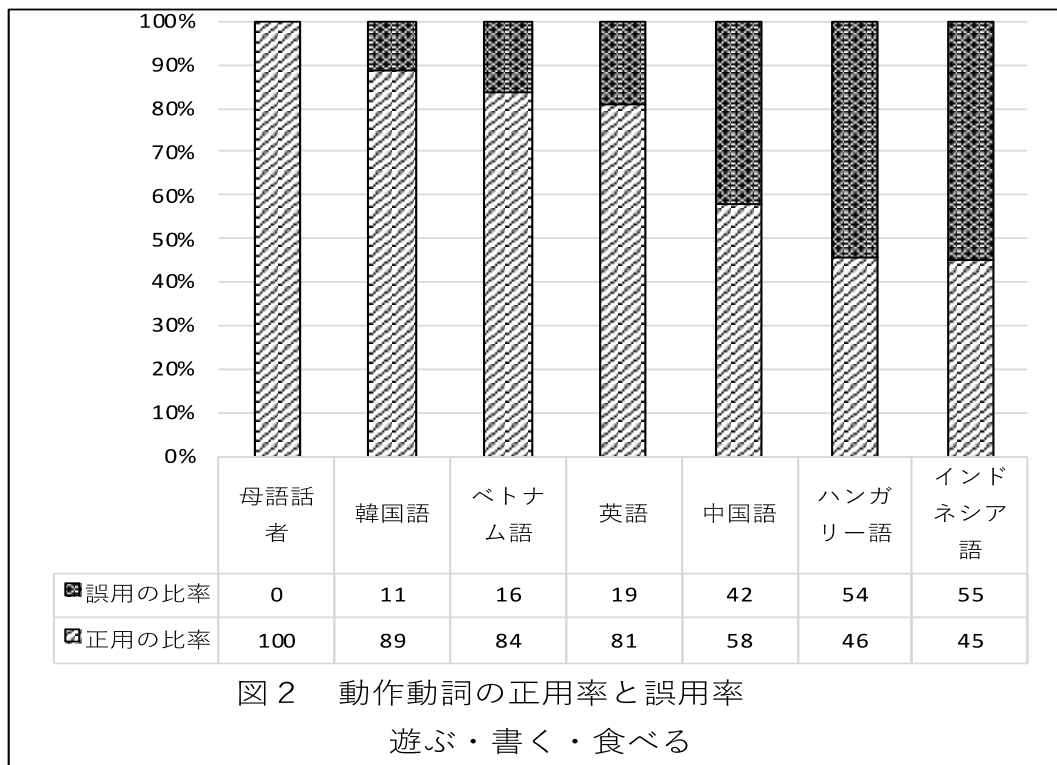
- (1) 富士山についての、絵を、書いています (CCH15)
- (2) ええと、子ども、ええと男の子が何か食べているかな (EUS14)
- (3) えと一窓のガラスは、えと壊れています、こわ、壊れています (IID17)
- (4) 男と女がーう腕を組んでいて、座っています (HHG46)

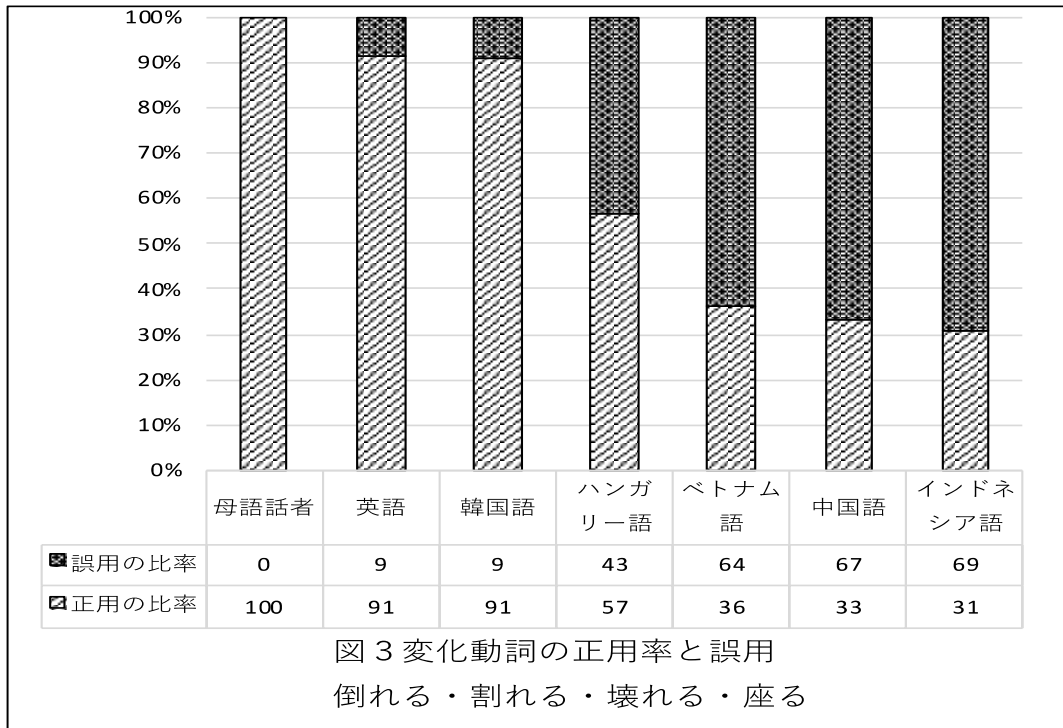
<誤用例>

- (5) 画家が、何、何かを書いてありますが、何を書いてあるのかは、よくわかりません (KKR11)
- (6) あのちっさい子が、あの、何かアイスを、食べるみたいです (HHG26)
- (7) 窓があー、壊れてえーと、あー、うん、あー、椅子が、あー倒れます (VVN49)
- (8) この恋人はえー公園の椅子のようなものにえー座ります (IID15)

(3)のように何回か言い換えている場合は、最後のものだけをカウントした。

図 2 と図 3 は、各母語話者グループの正用率と誤用率を示したものである。図 2 は動作動詞が用いられた場合で、テイルの形で進行中が正しく表現されているかどうかを判定したもの、図 3 は変化動詞が用いられた場合で、テイルの形で結果残存が正しく表現されているかどうかを判定したものである。





動作動詞の場合は、韓国語、ベトナム語、英語話者の正答率が高い。一方、変化動詞の場合は、英語、韓国語話者の正答率が相変わらず高いが、動作動詞で正答率が高かったベトナム語話者は、変化動詞では一転して誤答率のほうが高くなっている。

次に、各グループの動作動詞と変化動詞の正答率を比較する。表2は不等記号の左側に動作動詞の正答率、右側に変化動詞の正答率を示したものである。

表2 動作動詞と変化動詞の正答率

	韓国語	英語	ハンガリー語	ベトナム語	中国語	インドネシア語
動作動詞 VS. 変化動詞	89 < 91	81 < 91	46 < 57	84 > 36	58 > 33	45 > 31

以上の調査結果をまとめる形で、それぞれの母語話者の特徴を示す。

1. 中国語話者：変化動詞の正答率が低い。また動作動詞の正答率もあまり高くない。このことから、進行中のほうが結果残存よりは習得が進んでいるが、どちらも十分な習得には至っていないことが分かる。また、動作動詞の場合にスル、変化動詞の場合にシタを使った誤用が多い。

2. 英語話者：動作動詞、変化動詞ともに正答率が高く、進行中と結果残存の習得はバランス良く進んでいる。わずかではあるが、動作動詞の誤用のほうが多く、進行中の方

が先に習得されるというアスペクト仮説と矛盾する結果を示している。ただし、英語話者の人数は9名と少数なので、さらに人数を増やして調査する必要がある。

3. ハンガリー語話者：動作動詞、変化動詞ともに正答率があまり高くない。変化動詞の誤用はすべてがシタを使ったものである。わずかではあるが、動作動詞の誤用のほうが多く、進行中の方が先に習得されるというアスペクト仮説と矛盾する結果を示している。

4. インドネシア語話者：テイルの使用が最も少なく、動作動詞も変化動詞も正答率が低い。進行中、結果残存の習得はどちらも遅れている。

5. 韓国語話者：動作動詞、変化動詞ともに正答率が高く、進行中と結果残存の習得はバランス良く進んでいる。変化動詞の場合にシタを使った誤用が比較的多く観察される。わずかではあるが、動作動詞の誤用のほうが多く、進行中の方が先に習得されるというアスペクト仮説と矛盾する結果を示している。

6. ベトナム語話者：進行中は正答率の高さから習得が進んでいることが分かるが、それに比べて結果残存の習得が大きく遅れている。また、進行中の誤用にスルを使ったものが多くを占める。

アスペクト仮説では、母語の別にかかわらず習得の初期段階において継続相の形態が活動動詞 (activity verbs) と強く結びつくことを主張し、日本語においては結果残存よりも進行中のほうが先に習得されると述べている。しかし、以上にまとめたように、継続相の習得状況は母語話者グループごと大きな違いを示しているだけでなく、韓国語、英語、ハンガリー語の母語話者グループはアスペクト仮説と矛盾する結果を示している。アスペクト仮説の妥当性については、さらに多くのデータに基づく検討を行う必要がある。

5. まとめ

第二言語の文法形式の習得には母語の文法と目標言語の文法との異同のほかに、教室や日常生活でどのような目標言語にどの程度接しているかというインプットの質や量に関係する。また、峰 (2019) や Sugaya & Shiraishi (2007) は、結果残存の習得を困難にする要因の一つに、完成相のシタや「他動詞+テアル」といった競合する相手の存在を挙げているが、この指摘にあるように、特定の形式と意味のマッピングが一对一对応をしているかどうかということも関係する可能性がある。さらに、手続き的知識を要求される即興的発話なのか、宣言的知識を活用できる時間をかけた作文や文法テストなのかといったタスクの違いも、正用や誤用の現れ方に違いを生じさせる要因となる。アスペクト仮説、プロトタイプ理論など普遍的な習得パタンの存在を仮定する理論の妥当性も、これら多数の要因の影響を考慮に入れて検討しなければならない。

本稿は、これら複雑な習得の要因の中から、母語の影響と動詞の語彙的アスペクトという点に焦点を当ててテイルの習得に関する調査を実施した。その結果、母語によって異なる特徴がさまざまに見られることが明らかになった。中級後半の学習者集団であるにも関わらず、母語によるこのような異なりが見られたことは、テイルの習得に母語が大きく影響していることを裏付けている。しかし、それぞれの母語の何が要因となってテイルの習得に影響を及ぼしているのかといった点については、中国語など限られた母語話者の習得が研究されているだけである。この問題を明らかにするには、日本語と学習者の母語との対照研究、日本語のインプットの環境調査、学習者に課すタスクの精査など多方面からの分析を行い、それらを統合する形で一步一步研究を深めていく必要がある。

使用したコーパス

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) 』 (中納言 2.4.5 データバージョン 2021.05)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2021年12月28日)

付記

本研究は、国立国語研究所共同プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の研究成果の一部である。

参考文献 (REFERENCES)

1. 稲垣俊史 (2011) 「中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得について—アスペクト仮説からの考察—」『中国語話者のための日本語教育研究』2, pp.15-26.
2. 奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』むぎ書房
3. 簡卉雯 中村渉 (2010) 「台湾人日本語学習者の「ている」の習得に関する縦断研究: 「結果の状態」の用法を中心に」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』5, pp.83-92.
4. 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断的研究」『日本語教育』95, pp.37-48.
5. 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
6. 小山悟 (2004) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—母語の役割と影響を中心に—」小山悟・大友可能子・野原美和子編『言語と教育: 日本語を対象として』, pp.415-436, くろしお出版
7. 菅谷奈津恵 (2004) 「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究—L1の役割の検討—」『日本語教育』123, pp.56-65.
8. 砂川有里子 (近刊) 「第8章 テンス・アスペクトの習得と指導法—中国語話者のテイル使用の経年変化をもとにして—」張林・野山広・石黒圭・岩崎拓也編『北京日本語学習者縦断コーパス「B-JAS」と日本語の教育研究』北京師範大学出版社
9. 冉露芸 (2021) 「中国語テンスの特徴から見るテイル形の日中対照研究」『一橋日本語教育研究』9, pp.31-45.
10. 陳建璋 (2015) 「台湾人日本語学習者によるアスペクトの習得について—「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響に関する縦断的考察—」『日本教科教育学会誌』38(3), pp.77-90.
11. Sugaya, N., and Y. Shirai. (2007) The Acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 Learners of Japanese: Transfer, universals, or multiple factors?. *Studies in Second Language Acquisition* 29(1), pp.1-38.
12. Vendler, Z. (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.